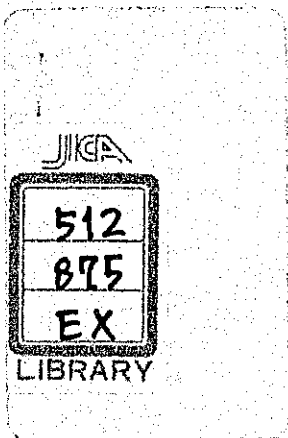


ガーナに於ける雑鑑別技術指導報告書

昭和43年8月

中近東アフリカ技術協力計画専門家
新 妻 覚

海外技術協力事業団



目 次

1. はじめに	1
2. 派遣実現に至るまでの経過	1
3. 講習実施状況	2
4. 総評・効果・問題点	5
5. ガーナに於ける養鶏の現状と将来	7
6. その他の参考事項	8
7. おわりに	10

JICA LIBRARY



1064191[8]

国際協力事業団

受入 月日	'84 3 15	512
登録No.	00397	875
		EX

1. はじめに

昭和43年3月7日から7月12日までの4ヶ月間、ガーナに於ける雛鑑別技術指導のため中近東アフリカ技術協力計画に基づき専門家として派遣され、此の度任期を終え帰国しましたので、今回の派遣実現に至るまでの経過、講習実施状況、総評・効果・問題点、ガーナに於ける養鶏の現状と将来、その他参考となる事項等について報告いたします。

2. 派遣実現に至るまでの経過

ガーナに於ける動物蛋白資源の増産を目的として、国内養鶏産業の発達を図るため、中部地区ウィネバ町郊外に、国営事業として最新式孵化場と附属種鶏場が開設され、1967年7月より試験操業を開始した。翌月8月公式開場式が催された際、参列した日本の駐在大使鶴我七蔵氏と、ガーナ農業省畜産局長 H. E. トンプソン氏との間に、はじめて日本の雛鑑別技術のガーナへの導入について話し合いが持たれた。次いで8月10日附をもって正式に、雛鑑別技術専門家の派遣要請の申し入れが日本側になされた。

当時、ガーナ農業省当局は、日本が40数年前雛鑑別技術を発見して以来、世界の指導的地位を占めていることをよく承知していた模様で、この技術指導の話をも日本側に申し入れて来たものと思われる。

従来、ガーナに於ける採卵並びに採肉用として育成される初生雛の90パーセントは、国外から輸入されていたが、国営孵化場の操業開始以来、これら初生雛の輸入が全面的に停止され、国内産初生雛の増産が何よりも急がれることとなった。国内産初生雛を養鶏農家に供給するには、これを先ず、雌雄鑑別しなければならないので、日本式雛鑑別技術を導入して、孵化場従業員を教育して、雛鑑別の実務に当らせることが焦眉の急務となった。

雛鑑別技術には、指頭鑑別と機械鑑別との二通りの方法があり、指頭鑑別は速度に於いて優れ、大規模産業養鶏の中に於ける鑑別業務に適当し、一方機械鑑別は、技術の習得が比較的容易であるが、速度に於いて稍劣るため、小規模孵化場に適当している。しかし、人件費の安い低開発国では、技術者を多数使用すれば、速度のおそい点はこれを補うことができるので、技術習得が容易であるという利点のみが残ることとなる。当ガーナ国の事情はこれに該当し、機械鑑別法が採用されることとなった。

昭和42年10月21日、ガーナ農業省より日本政府に、正式文書をもって、雛鑑別技術指導専門家の派遣の申し入れがあり、外務省経済協力局より、海外技術協力事業団を通じ、同年11月18日、農林省農林経済局長に回附され、次いで12月4日、農林省畜産局長に要請状

が届いた。当初、先方が機械鑑別を指定して来たため、関係当局者間に於いて、技術者派遣の是非について論議がなされ、これがため相当期間が経過した。

昭和42年12月25日、一応、機械と指頭とに拘らず、技術者を派遣することについて、これを可とする意見が一致し、農林省畜産局長より、社団法人全日本初生雛鑑別協会に宛てて技術者の推薦の依頼があり、同協会に於いては、43年1月11日附で、機械鑑別技術者の中より適格者を募集することとなったが、それぞれ事情があつて、承諾が得られず、結局、機械鑑別技術者よりの候補者の人選は不調に終つた。

一方、ガーナ側に於いては、国営ボマヅ孵化場が43年7月より本格操業に入るため、雛鑑別業務を担当する技術者を早急に養成する必要があるとして、日本からの技術指導員をなるべく速やかに派遣するよう、強く要望していたので、社団法人全日本初生雛鑑別協会では、過去2年、インド及イラクに鑑別技術指導専門家として派遣された経験をもつ私に、同年2月、ガーナへの出張を命じて来た。次いで2月26日、ガーナ政府よりの同意書も到着し、派遣が確定した。

そこで、日本に於いて最も機械鑑別が多く普及している長野県下に於いて、実際に就業中の優秀な機械鑑別技術者について、急いでこの技術指導のため必要な知識の研修を受けてこれを習得し、3月6日には、携行器材として、先ず鑑別器械(チックテスター)6台の発送手続きをし、出発準備を完了し、翌3月7日、任地に向けて出発、3月12日、ガーナ国アクラに到着した。直に、農林省畜産局と技術指導計画を打合せた後、3月15日、任地ウィネバの国営ボマヅ孵化場に着任した。

3. 講習実施状況

3月15日、ウィネバ町在にある国営ボマヅ孵化場の任地に到着、場長D. ANKRAH氏と技術指導講習実施計画を打合せた。これより先、ガーナ側に於いては既に孵卵が始つていて第一回が3月29日に発生することになっていたもので、とりあえずこの雛を利用して、技術指導の講習をはじめることとした。畜産局長の要請により、講習生はボマヅ孵化場の従業員の中より選抜することとなり、中学卒業程度の学歴を有する、年令18才より32才までの、男子6名、女子5名が選ばれた。

< 第一表 >

講習生氏名・性別・年齢

RICHARD B. AHUBA	男	20
JOHN ARHIN-SAM	男	18
ALICE BAIDOE	女	32
GRACE APPIAH	女	25
CHRISTIANA ATTOPLEY	女	18
GRACE KOFIE	女	19
ELIZABETH AFFUL	女	18
STEPHEN ADDAE	男	23
JOHN ARKOFUL	男	18
VICTOR B. AMISSAH	男	23
RICHARD OCRAN	男	22

講習実施日割

3月29日より4月7日までの間、4日

初生雛の保定法、チックテストの原理と操作法、雌雄の相異点の教示等、初心者指導を行う。(使用材料557羽)

4月9日より4月27日までの間、12日

無鑑別初生雛を与えて自由に鑑別せしめ、これを再検、誤りについて指導を行う。

(使用材料 2848羽)

4月30日より6月12日までの間、6日

鑑別の中率を測定、再検して誤を指摘し指導する。(使用材料2427羽)

6月18日より7月3日までの間、10日

鑑別の中率及び所要時間を測定、再検して誤を指摘し指導する。

(使用材料6049羽)

7月5日

最終試験を施行する。

< 第二表 >

4月30日より6月12日までの間の毎回の平均鑑別の中率(%)

4/30	5/1	5/3	5/7	6/11	6/12
99.6	85.6	94.8	84.4	87.5	89.3

6月18日より7月3日までの間の毎回の平均鑑別の中率(%)

6/18	6/19	6/21	6/22	6/25	6/26	6/28	6/29	7/2	7/3
92.0	94.3	94.4	96.3	95.0	96.6	99.7	98.6	99.3	99.3

< 第三表 >

7月5日施行最終試験成績表

成績 順位	氏 名	供試 羽数	鑑別率 %	所用時間 分 秒	備 考
1.	CHRISTIANA ATTOPLEY	100	100	20.15	女18
2.	JOHN ARHIN-SAM	100	100	24.30	男18
3.	GRACE KOFIE	100	100	28.20	女19
4.	ELIZABETH AFFUL	100	100	46.40	女18
5.	ALICE BAIDOE	100	100	54.30	女32
6.	GRACE APPIAH	100	100	66.30	女25
7.	RICHARD B. AHUBA	100	96	51.00	男20

7月5日、講習修了式を開催し、農業省畜産局長H. E. THOMPSON氏より講習修了証書と褒賞が授与され、所定の技術指導事業を終った。この修了式の際には、ガーナ農業省次官代理 G. L. K. M. MARKWEI 主席秘書官、ガーナ駐在大使館 内田書記官等が臨席され、ガーナ側より、本指導事業及び器材贈与に対する感篤なる謝辞が述べられた。7月8日、農業省畜産局長に最終報告書を提出し、離任の挨拶を述べ、7月10日帰国の途についた。

4. 総評・効果・問題点

当ガーナ国は1957年3月、英領植民地から独立して以来まだ日が浅いが、近代国家の仲間入りをすべく、国を挙げての努力の意欲が見られる。二年前、時のエンクルマ大統領を追放して以来、地道に経済再建に努めており、今回の技術指導事業を行った処の、農業省畜産局所属ボマジ孵化場も、ガーナ養鶏の発展のため、先進国から優秀な種鶏を導入して、鶏種の改良に努め、アメリカ製巨大孵卵器10台を具えて、国内で必要とする初生雛の自給自足を図ることを目的として、新にスタートしたところである。

ここに働く従業員には、低開発国にあり勝ちの無気力さは全く見られず、能率こそ劣るとはいえ、勤労意欲に於いては見るべきものがあり、殊に当地の風習によるのか、女子が労働の先頭に立って、男子をリードし、単調な仕事や骨の折れる仕事は、女子の受持ちとされているようであった。今回の講習生11名中、女子は5名いたが、男子2名は途中で落伍し、女子のみは全員優秀な成績で講習を終了し、良く働くガーナ女性の真価を遺憾なく発揮した。

(第1表参照)

3月29日講習開始以来4月いっぱいには割合に潤沢に材料が供給され、講習も順調に進行したが、若鶏の成鶏舎への移動がはじまり、それまで種卵生産の主力であった古い種鶏が大量に淘汰され、その上飼料中毒等の事故があったため、種鶏の産卵量が一時甚だしく低下し、5月9日から6月10日までの1ヶ月間、講習は空白状態となり、専門家の滞在を1ヶ月間延長させるの止むなきに至ったことは、予想外のでき事であった。

6月11日より再び、若鶏の種卵からの講習材料雛が出はじめたため、講習は再開されて軌道に乗り、講習生9名中2名は常時100パーセントの正確率を保持して、本講習の成功を示してくれたことは嬉しかった。しかし、6月26日以降は、講習材料雛の供給は必ずしも充分とはいえず、講習の最後の仕上げの時期に至って材料が充分に与えられなかったことは、速度の短縮という課題が、後日に持ち越されたことを意味し、残念であった。

(成績第2表参照)

6月11日、講習を再開するに当って、日本より購送された追加機材、チェックテスター6台が到着し、それまで講習生9名に対して6台のチェックテスターで無理な講習をしていたのが、その後一人に一台ずつ使用できるようになり、講習を大へんスムーズに行なうことができるようになったことは非常に有難かつた。それにつけても、最初から一人に一台ずつ与えられたら、もっと上達が早かったことだろうと惜しまれた。

7月5日、最終試験を施行した際には、講習生9名中、7名が受験し、その内6名までが全

部適中という優秀な成績を収めた（第3表参照）が、これは講習生の素質の優秀さと勤勉さとを証明するものであると思われる。殊に女子5名は全員そろって全部適中という立派な成績を収めたことは褒められてよいと思う。所要時間に於いてまだ改善の余地を残しているとはいえ、これは今後の練習次第で逐次短縮することが可能であるから、43年秋からの、ボマジ孵化場での実務に当っては、充分にその職責を果たしてくれることであろう、又、今回の修了生の中の上位の3名は、ボマジ孵化場で実施する鑑別技術者養成事業の指導者としての任務にも充分堪えられるだろうし、ガーナ政府が期待する雛鑑別技術の近隣諸国への技術指導という使命をも、充分果たしてくれるものと思われる。

今回実施した技術指導事業を、日本に於ける初生雛鑑別技術者養成事業と比較して見ると、練習生の制限年令に於いては、日本のそれを超える者が一名あったが、他は総て制限以下であった。練習時間に於いては、日本では、指頭鑑別は5ヶ月、機械鑑別は2ヶ月を必要とされているが、今回の技術指導に於いては、正味講習日数は32日に過ぎなかった。使用材料に於いては、日本では講習材料として、拔雉の入手が比較的容易であるため、毎日最低100羽以上の材料の使用が可能であり、且つこれを反覆して使用するため、一日の練習延羽数は数百羽にも相当するが、今回の指導事業に於いては、全期間を通じて供給された材料初生雛の総数は11,881羽に過ぎず、即ち、一日当り372羽となり、これを9名で分けて使用するのであるから極めて少数となり、しかも、講習後半に於いては、鑑別による初生雛の育成率への影響を調査する必要上、一回の練習の後、直ちに育雛部へ送られることになり、反覆使用ができなかったため、練習量は日本と比べて甚だしく少なかったといえる。

それにも拘らず、講習生の大半が100パーセント鑑別の技術を習得して、今回の技術指導事業を成功裡に終了することができたことは、第一にガーナ農業省の熱意によることはいうまでもないが、現地の日本側外交当局の関係者の方々の骨身惜しまぬ協力や支援が有ったればこそであり、又、内地からの効果的にして迅速なる応援も大いに預って力あり、これらの熱意と善意とが結集し、有能にして勤勉なる受入態勢の整った良い環境を得て、今回の成果を結んだものといえると思う。

本技術指導事業の実施を通じて、日本が低開発国の技術援助に積極的であることを実地に証明し、且つ、初生雛鑑別技術に関する限り日本が世界の指導的地位を占めていることを改めて認識せしめ、又、この技術を日本が独占し、外国に公開することを好まないという、従来の誤れる概念を是正し、ガーナの養鶏産業の発展にいささかなりとも貢献し、両国の国際親善にも益するところがあったことを信じて止まない。

今後の問題点としては、一部の技術協力事業の例にある如く、技術指導専門家の滞在している間はうまく事業が進行するが、一旦指導員が離任すると、もうあとは事業の運行が行きどまりとなり、だんだん日時が経つうちにいつの間にか影も形もなくなるという、龍頭蛇尾の例があるというが、本指導事業に限ってはそのような懸念は全くないといってよく、時の経過と共に技術の内容が向上し、更に今回の修了生による二次訓練も実施されて、益々多数の優秀な技術者が育成されて、本指導事業がガーナの地に於いて花開き実を結ぶことを確信するものである。しかし、それがためには、時折り日本側現地当局者が、その後の現地状況を視察したり、有効な助言や指導を与えたり、機材のアフターケアを行ったりして、先方と密接な接触を保ち、常に援助の手を絶やさぬことが何より大事であると思われる。

5. ガーナに於ける養鶏業の現状と将来

ガーナの畜産は極く少数の肉牛と山羊があるのみで、漁業も小規模沿岸漁業のみで、海産物もあまり食糧に上らず、野生の小獣肉を食用とする以外は、養鶏業が独り一般国民の蛋白食糧給源として重要な地位を占めている。ガーナに於ける産卵鶏及び肉用鶏飼育農家の必要とする初生雛の90パーセントは、従来欧州やカナダ、アメリカ等から輸入されていたことは既に記したが、国营ボマジ孵化場の開設以来、初生雛の輸入許可が全面的に停止となり、ボマジ孵化場の本格操業が一日も早く待たれるのが現状である。

当ボマジ国营孵化場は、輸入系の卵用種及び肉用種の種鶏10万羽の飼養設備を有し、収容能力10万卵巨大孵卵器10台を具えて、ガーナ第一の規模を誇り、1967年7月操業を開始したばかりである。ガーナ国内にはこの他に二三の州立孵化場と、小規模民間孵化場があるが問題とするには足りない。

ガーナの首都アクラは北緯5度5分に位置し、赤道に近い割合には平均気温25度と涼しく海洋に面するためか寒暑の差が少く、鶏舎建築に開放式が採用できるため、建築費が経済的で、他の熱帯地区より遙かに有利であり、養鶏産業には絶好の気象条件をそなえている。

近い将来、ガーナ国民の生活水準が向上するに伴い、食生活も向上し、鶏卵及びブロイラーの需要も増大することは明らかであり、ガーナ農業省が国营事業として養鶏事業を採り上げた意図は誠に時宜を得たものといえる。しかしながら、畜産業の基礎となる飼料の生産が少ないため、外国からの輸入に頼らなければならないことは甚だ危険である。必要とする飼料原料がないため規定の配合ができず、代用品をもって替えたため産卵率の低下を招くとか、或は飼料用魚粉を輸入して長期間貯蔵したため変質し、これを給与したため中毒症状を起す等、いろいろ

る問題をかかえている。尙、ガーナでは玉蜀黍を人間の主食とするため、養鶏飼料と競合する点にも問題がある。次に、近代養鶏と鶏病対策とは切っても切れぬ関係にあり、高度の防疫態勢を整えることが近代養鶏の必須条件となっているが、ガーナに於いては、消毒薬一本、噴霧器一台も輸入する以外になく、ましてワクチンの生産等はまだまだ先のことであり、飼料や器具は申すまでもなく、高価な医薬品まで全部輸入に頼らなければならないこの国の養鶏は誠に容易ではないといえる。

しかしながら、東南アジアや中近東諸国の養鶏と比較すると、気象条件に於て恵まれ、国民の勤勉さに於て比較にならぬ程優れ、指導者の能力又優秀にして、命令機構が単純にして明快、事務機構の煩瑣さがなく、国全体が独立直後の活気に溢れ、国民にやる気がある等、数々の有利な条件にめぐまれているので、ガーナに於ける養鶏業の将来性は非常に明るいものといえよう。

6. その他の参考事項

ガーナはイギリスの真南に当り、日本との時差は9時間で、ガーナの正午は日本では夜の9時に当る、日本からはこのように地球の裏側といってもよい位離れているので、日本人がガーナについて知っていることといえば、ガーナチョコレートのガーナか、東京オリンピックの時に色鮮やかな民族衣裳を着て行進した国とかいうくらいであり、少し古い人でも、野口英世が黄熱病で斃れた国として記憶しているくらいのものであろう。

この国は昔は黄金海岸と呼ばれ、永い間イギリスの植民地だった国であり、極めて非健康的なジャングルに覆われた、象や鱉の住む未開究国が想像されるが、しかし、現実この国へ行って見て驚くことは、首都アクラはよく整備された街路樹の美しい、自動車か賑やかに行き交う近代都市であり、そこには、世界中から輸入された消費物資が、値段こそ高いが、何でも手に入るように飾られてあり、重工業こそまだないが、軽工業は自給自足を目指して急激に勃興しつつあり、鉱物資源と森林資源に恵まれた、前途有望の新興国家でした。

日本からは電気製品と繊維製品が多く輸入されており、ここ数年来自動車の輸入が急増しつつあり、町にはニッサン、トヨタの車が多く見られ、これらは主にタクシーとして活躍しており、又これらの小型トラックが、荷台を改造して木製の椅子をとりつけて、庶民の足として活躍している。近頃トラクターのような重機械も日本から輸入されている。トランジスタラジオとテレビは日本製が大いに巾をきかせており、日本とガーナの共同出資による現地組立工場もあり、西欧資本を向うに廻して気を吐いている。

ガーナの人達の日本人に対する感情は非常に良好で、イギリスの植民地であった当時から、繊維製品の本場の国として親しんで来たようである。当時の日本製繊維品は、安かろう悪かろうの定評があったそうで、これは当時イギリスが日本製の高級織物のレッテルだけをつけ変えて、イギリス製品として高価に販売し、粗悪品のみを日本製として売らせたからだ、大変同情的な解釈をしてくれるが、これにはいささかすぐつたい感じがしないでもない。しかし、イギリスの統治を離れて、今日日本から直接物資を輸入するようになって見て、日本製品が一級品の品質であることを発見して、以前の噂がいよいよ真実となってガーナの人達に信じられているようである。トランジスタやエレクトロニクス、新幹線や造船によって代表される近代工業国家として日本に絶大な敬意をはらってくれており、日本では既に原子力発電の時代に入ったという、讃嘆の声を惜しまない。ガーナ唯一の水力発電所のあるボルタ人造湖は世界第二位の貯水量を誇り、豊富な電力を産み出しているが、この電力を有効に活用する工業が未開発のため、余剰電力を隣国に買って貰っている状態である。

この国のアクラ郊外にある日本の繊維訓練センターに働く海外技術協力事業団の技術者のことについては、今更改めて申し述べるまでもないが、日本の商社の大手筋はほとんど全部現地に顔をそろえており、その他に、中国系商社に技術幹部として長く留まっている特異な日本人技術者もおるし、現地の工場に技術者として働く、外人部隊のような日本人も相当いるとか、これらの実態は明確にはつかめないようであるが、ガーナに働く日本人の総数は約60名乃至70名といわれている。

この他、漁港テーマには、常時日本漁船が碇泊しており、アクラの街頭を歩くとしばしば日本人同胞に会うことができる。しかし、日本人と支那人とは現地の人には区別がつかぬらしく、両者は混同されるが、エンクルマ政権当時多くの支那人が政治顧問や技術指導員として滞在した名残りのようである。日本人の中には、現地で生活を楽しむ、長く滞在を望む者と、一日も早く帰国を望む者の二つの型があるようで、私の接した日本人はおおむね前者の型に属するようであった。しかし、多くの日本人の中には、低開発国人種に対するいわれなき優越感から、好ましからぬ言動をする者もあるとかで、折角真面目に働いている同胞の努力に水を差すような結果にならねばと案じられぬでもない。

ガーナは1957年3月、エンクルマによってイギリスから独立してまだ11年と日が浅く、巨人エンクルマによって敷設された民族主義の路線を走り出して、アフリカの黒い星として尊敬され、国力を誇示する大仕掛の外交や、大工業化政策を展開し、アフリカの強大国になるかと思われたが、とたんに“独立の父”はその座を失い、今は平和な民主国家として生まれ変わろうとし

て、国を挙げての努力の最中である。

しかしながら、アフリカに珍しい広大で活気溢れるテーマ港や、隣接の工業地帯、或いは首都アクラとテーマを結ぶ立派な高速道路、アクラ北方50キロのアコンボにある貯水量世界第二位といわれる大ダムと発電所、等のエンクルマの遺産と、又児童の就学率85パーセントという低開発国中では驚異的な教育普及率等、現政権下の国民が、その有形無形の恩恵を蒙っているエンクルマの偉大さは、これを否定することはできない。

ガーナが一次産品生産国から、近代工業国家に脱皮するには、後発国としてのハンデを負っているので、人一倍の努力が必要であり、この過程に於いて、ガーナが骨を折って生産する工業製品が、先進国の製品と比較して見劣りし、価格競争でも勝てないのは当然であるが、ガーナの国民に国産品蔑視、舶来品崇拜の気風が浸潤してしまった現在、ガーナの工業化への道はまことに険しいといわねばなるまい。

先進工業国が当座の利益を度外視して、新鋭設備の供与、経済援助、技術援助を無制限に近いまでに注ぎ込んで育成する覚悟でなければ、ガーナの工業化、延いては近代国家への脱皮は不可能であろう、そして、これを西欧資本主義陣営がやらなければ、ガーナは反対側の陣営に救いの手を求めるにちがいない。このことがよく判っているので、今や西側先進諸国は、きそつてガーナへ近代化のための経済援助とを行っている。しかしながら、日本はアフリカがあまりにも遠いため、未だ有効な手を打つまでに至らず、形勢を観望中であるようだが、日本は今すぐ乗り出さないと、貿易拡大のための足場を西欧諸国によつてしめ出され、バスに乗りおくれるおそれが多い。幸にして、日本とガーナとは、西欧以上の親近感と好意によつて結ばれており、日本の技術を極めて高く評価してくれておるので、為政者の方々の有効にして適切、迅速にして果敢なる施策を切に望む次第である。

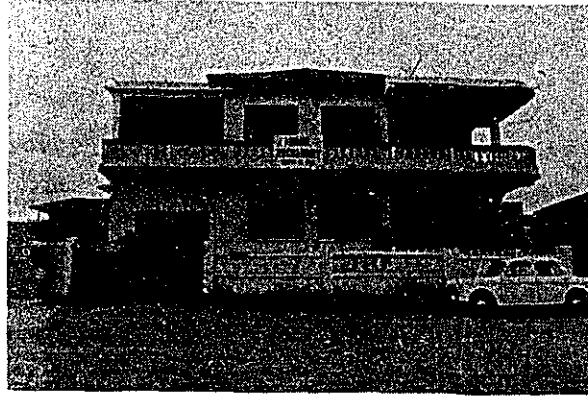
7. おわりに

ガーナに於ける鑑別技術指導事業を終り、ここに最終報告書を提出することになりましたが、私の派遣実現に至るまでの、外務省、農林省の関係各省庁の御好意と御支援とに対して、深甚の謝意を表します。尚、任地滞在中に、在ガーナ日本大使館員諸氏や、事業団の現地駐在員の方々に、家族ぐるみの御親切と温い応援を戴きましたことを厚く御礼申し上げます。

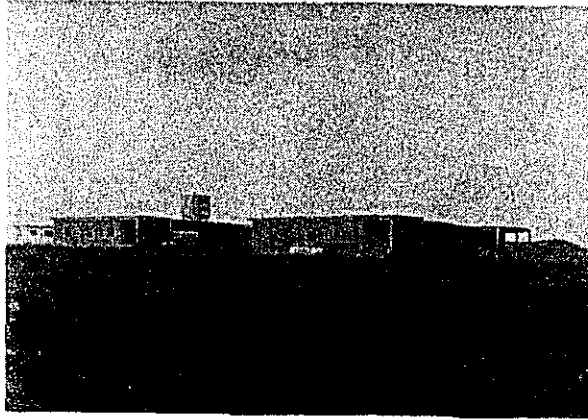
ガーナにはなお多数の、在外公館員諸氏や、日本商社員、技術指導員の方々が、熱帯の強烈な日射しの下で、真つ黒になって働いておられるのに私一人が先に文明社会に復帰して来たこと

について、申し訳け無さで一杯ですが、どうか御健康に留意され、日本カーナ両国の友好関係のため、益々御尽力下さいますことを祈念して、報告書を閉じます。

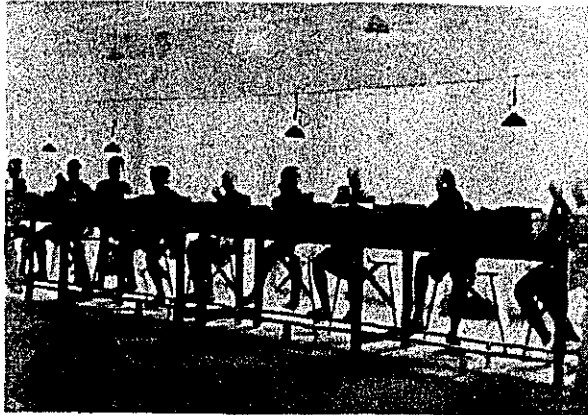
(筆者は 社団法人 全日本初生権鑑別協会理事)



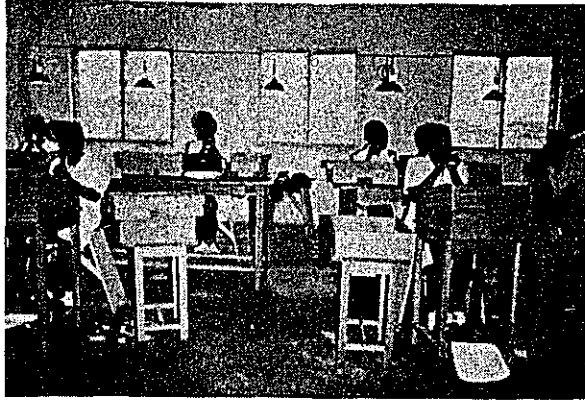
1. 農業省畜産局分室



2. ポマジ孵化場卵舎全景



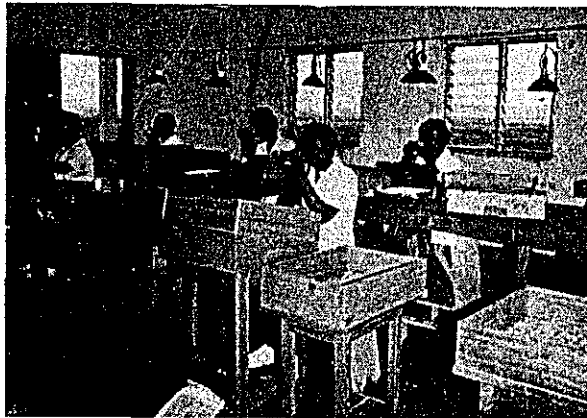
3. 技術指導風景 (その1)



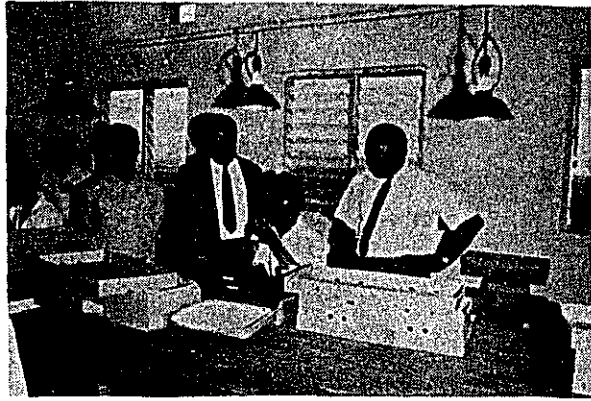
4. 技術指導風景 (その2)



5. 技術指導風景 (その3)



6. 技術指導風景 (その4)



7. 練習を見守るトンプソン畜産局長(右)とマークウェイ秘書官



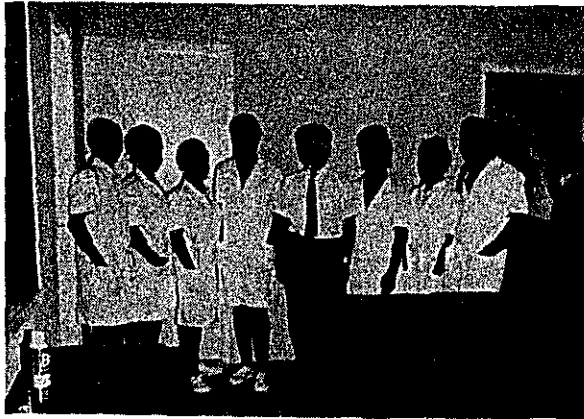
8. 首席の生徒に賞品を授与する内田書記官



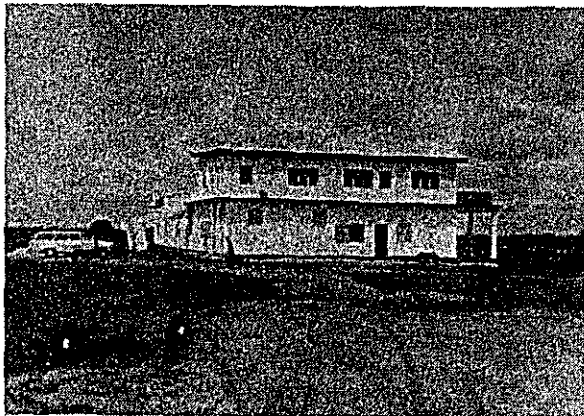
9. 式辞を述べるトンプソン畜産局長



10. マークウェイ秘書官より記念品を受ける筆者



11. 卒業生に囲まれて筆者



12. 筆者の4ヶ月滞在した政府宿舍

